

# JMMA

JAPAN MUSEUM MANAGEMENT ACADEMY

No. **73** Vol.19-4  
March 2015



関東支部会：第10回エデュケーター研究会



基礎部門研究会・近畿支部会共催研究会



北海道支部会：三笠市立博物館見学会



東北支部会：災害と展示の研究会

## Contents

- 2 【論考・提言・実践報告】「博物館展示の現在と今後の展開（後編）」……………高橋 信裕（JMMA副会長、常磐大学）
- 8 【研究部会開催報告】「平成26年度 基礎部門部会第7回 研究会 開催報告」……………林 浩二（千葉県中央博物館）
- 11 【研究部会開催報告】「平成26年度 基礎部門部会第8回・近畿支部会第2回 合同研究会 開催報告」  
……………江水 是仁（東海大学課程資格教育センター）
- 14 【支部会だより】北海道支部会「博物館がもたらす地域への経済効果 -北海道支部ミュージアムマネジメント研修会報告」  
……………中島 宏一（北海道支部幹事、一般財団法人北海道開拓の村）
- 16 【支部会だより】東北支部会「平成26年10月28日開催東北支部会『災害と展示の研究会』開催報告」  
……………佐藤 泰（仙台市生涯学習課）／渡邊 祐子（東北大学大学院 教育学研究科）
- 18 【支部会だより】関東支部会「『第10回関東支部会エデュケーター研究会』開催報告」  
……………西 記代子（徳島県立博物館文化推進員／英国イースト・アングリア大学博物館学科修士卒）
- 21 【支部会だより】九州支部会「九州産業大学国際フォーラム『高齢社会における博物館の役割を考える』」  
……………緒方 泉（JMMA九州支部長、九州産業大学美術館教授）
- 24 【インフォメーション】JMMA会員の皆様へのご願い、文献寄贈のお知らせ、法人会員一覧

論考・提言・実践報告

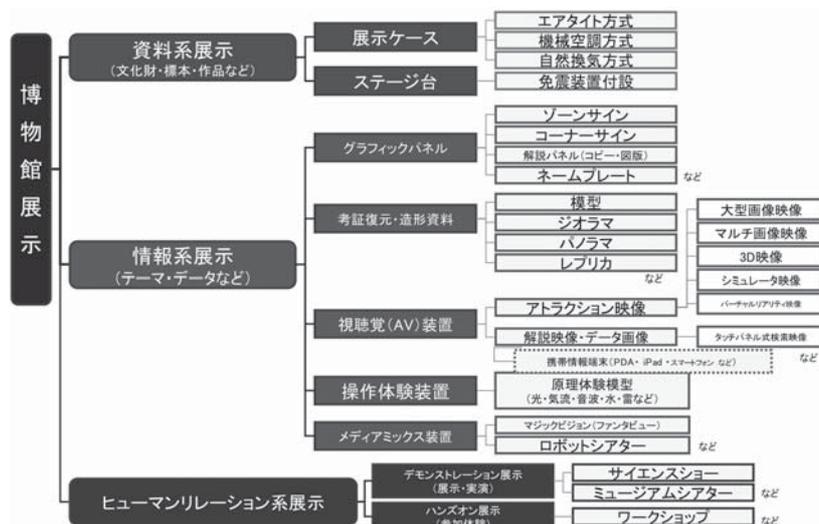
# 博物館展示の現在と今後の展開（後編）

高橋 信裕（JMMA副会長、常磐大学）

本論考は、会報70号（Vol.19-1）に投稿した「博物館展示の現在と今後の展開（前編）」の続編である。

先号の報告では、1.実物中心の展示を「資料系展示」として論を起し、実物資料である作品、資（史）料、文化財等の鑑賞、保存、メンテナンスの面から論述し、続いて2.「情報系展示」を取り上げ、2-1.グラフィックによる展示、さらに2-2.立体造形による再現展示（考証復元・造形資料）に視点を拡げ、2-2-1.模造標本まで論を進めた。今号では2-2-2.ボックスジオラマから論考を続ける。博物館展示を俯瞰する意味で、先号で提示した「展示形態及びメディア一覧」を参考として再出した。

■展示形態及びメディア一覧（参考再出）



## 2-2 立体造形による再現展示(先号に既出)

### 2-2-1 模造標本(先号に既出)

### 2-2-2 事物や事象の説明をリアルに造形化したボックスジオラマ

資料や標本等を個別に実物展示し、それらに文字や図表等のグラフィック表現を加えるスタイルに加えて、生息あるいは使用や用途の状況等を環境ごとリアルに造型化する展示手法が博物館展示に多く採用されるようになる。

こうした展示手法は、一般の人々の興味、関心を引きつけるとともに、理解を容易に導く効果から博物館独自の展示方法として発展していった。事物や事象の環境を背景に描き（遠近法を用いることが多い）、前面に立体造形物を配するボックス（スポット）ジオラマはそうした博物館独自の展示表現メディアのプロトタイプである。



道具、作業着、栽培植物、生産法、季節、風習・風俗等が三次元のジオラマに綿密に配置されている。(沖縄県立博物館・美術館)

### 2-2-3 ミニチュアジオラマ

視覚に臨場感をもちこみリアルに訴えるジオラマには、考証復元にあたっての学際的な研究成果が求められる。例えば考古学、建築学、植物学、人類学、衣服学、道具学、農学など、さまざまな分野からの専門的な考証がジオラマ表現を可能にし、同時に博物館資料としての価値が保障される。この種のジオラマスタイルには、四周からの観察を意図したオープンなミニチュアジオラマが多く見られる。本来、ジオラマと言えば、背景画に実物、剥製、造形物等の三次元の物象を配列したものとされてきたが、近年では必ずしも背景画を持たない再現立体造形資料をジオラマと呼称する例が多い。



町屋のジオラマ/縮小タイプ(三重県立総合博物館)



ジオラマ/縮小タイプ (三内丸山遺跡の復元家屋)

#### 2-2-4 情景再構成ジオラマ

事物や事象をよりリアルに再現し、没入感と臨場感を醸し出すことで、観覧者と展示との立ち位置を共有する実寸大の情景再現構成が、ジオラマの事例として博物館展示に導入されている。歴史系の博物館での導入例が多い。

展示の構成として、ジオラマと観覧者との間に結界を設ける見せ方と、結界を設けずジオラマの世界に観覧者自身も入り込み、タイムスリップ感覚をよりリアルに体感できるオープンな構成の事例が見られる。



ジオラマ/実寸大タイプ (沖縄県立博物館・美術館)



オープンジオラマ/実寸大タイプ (奈良県立万葉文化館 (万葉ミュージアム))

#### 2-3 音と映像を用いた視聴覚メディアによる展示

博物館展示における「視聴覚メディア」の採用と活用は、早くから見通されており、1930年頃既に棚橋源太郎は、その著書「眼に訴へる教育機関」(昭和5年11月10日発行/寶文館刊)で「単に標品、模型、絵画ばかりでなく幻灯や活動写真、映画の助けを借りることが極めて多い」とし、従来博物館が担ってきた「庶物示教や直観教授」の機能が、視聴覚メディアの登場と普及により、「遙かに広範囲に亘り、且つ多少の新しい味を加えてきた」と、博物館展示が新たな時代に移行しつつあることを予見している。

現代では、こうした視聴覚メディアの開発がコンピュータテクノロジーの進展によって、画像(静止画・動画)、音声等のマルチメディア化が可能となり、同時にアナログ形式からデジタル化への技術革新が記憶容量の飛躍的拡大及びデータ通信の超高速化をもたらし、加えて装置のハンディモバイル化と価格の大衆化が個々の情報装備化を促進し、「いつでも、どこでも、誰にでも」の情報環境が、博物館展示の現場に新たな潮流をもたらしている。

#### 2-3-1 アトラクションタイプの視聴覚メディア展示

博物館は教育機関であり、同時に学術研究機関の役割を担う施設であるが、一方ではレクレーションを楽しむ憩いの場としての役割も負託されている。その意味で、学びのなかで人々の関心を引き興味を促す興行的な要素が求められる。視覚や聴覚、時には触覚にまで訴求する視聴覚メディアは、博物館展示の目玉として集客力を発揮することから、CGやプロジェクションマッピングなど最先端の技術や手法が導入される。



長崎歴史文化博物館の大型マルチ映像展示



中国の屏風絵名画がCGにより動画化(上海万博/中国館)の展示例



3Dプロジェクションマッピング映像を導入した新江ノ島水族館のアトラクションシアター

### 2-3-2 データ検索を主とした双方向の視聴覚メディア展示

従来、博物館のグラフィック展示は、物理的な制約から限られた情報量しか伝えることが出来なかった。しかし、現代のコンピューター化の進展により、大量のソフト（情報）が電子ストック化されるとともに、高速度による情報検索が可能となり、近年の博物館情報のコミュニケーション環境は大きく変化してきている。ハードなグラフィック表現は、動線上での位置情報を担うサイン的機能に特化され、テキストや写真、図版等のリソースは、デジタルアーカイブス化され、双方向機能をもつコンピュータ表示装置（タッチパネル式ディスプレイデバイス）によって、観覧者の求める情報が提供される。

ジオラマ表現された博物館資料の情報やデータ等の受発信もタッチパネルシステムが担う展示構成が一般化してきている。



多種多様な哺乳動物の剥製群をタッチパネルシステムにより情報検索（国立科学博物館）



ジオラマ展示とタッチパネル映像展示との組み合わせ展示（遠野市立博物館）

### 2-3-3 パーソナルメディアを活用した視聴覚メディア展示

現代社会を象徴するキーワードにPDAやiPhone、iPad、スマートフォンなどの携帯情報端末が挙げられるほど個人の情報装備化は普及し定着してきている。博物館展示の視聴覚メディアもスタンドアロン方式からLAN化、さらにはネットを通じたオンライン化へと場の制約からの開放が進みつつある。利用者は自己の携帯するパーソナル端末メディアで、博物館展示と向き合い、蓄積してきた知識や情報を呼び出し、展示者や来館者同士（ファミリー、知人・友人ら）で会話し、展示をさらに深耕させていく、生きたフォーラムの場に向かいつつある。

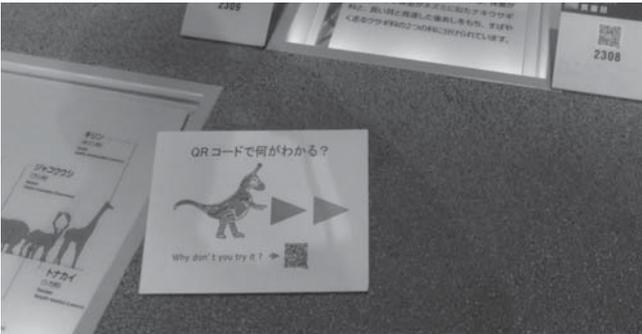
ネットを通じた新しいスタイルの「今だけ、ここだけ、あなただけ」の博物館体験が、オンライン化のもとで生まれようとしている。

ここでは、ソニーのPSP（プレイステーションポータブル）を採用し、内蔵されたディスクのソフトから展示物の情報を選択する国立民族学博物館のモバイルメディアの事例と携帯電話でQRコードを読み込み、情報を取り込む神奈川県立生命の星・地球博物館の事例を紹介する。



ソニーのPSP（プレイステーションポータブル）に機種変更した民博ガイド





QRコードで表示された展示情報を自らの携帯電話で取り出す  
(神奈川県立生命の星・地球博物館)

**2-3-4 先端テクノロジーによる新たな視聴覚メディア展示の開発**

3D映像REI (Ray Emergent Imaging) をはじめメガネなしで飛び出す臨場感あふれる立体映像など先端テクノロジーの開発と実用化の動きがマスコミを賑わせている。3D映像をはじめ、3Dプリンター、バーチャルリアリティ体験映像などの先端技術が今後の博物館展示に取り込まれることが予測される。その事例について紹介する。



見る立ち位置で画像の視界が変わる3D映像(うめだ/ナレッジキャピタル)



試着を簡単に手早くバーチャル体験(うめだ/ナレッジキャピタル)



超高精細デジタル画像で名画のディテールまで自由にアクセスし鑑賞  
(うめだ/ナレッジキャピタル)



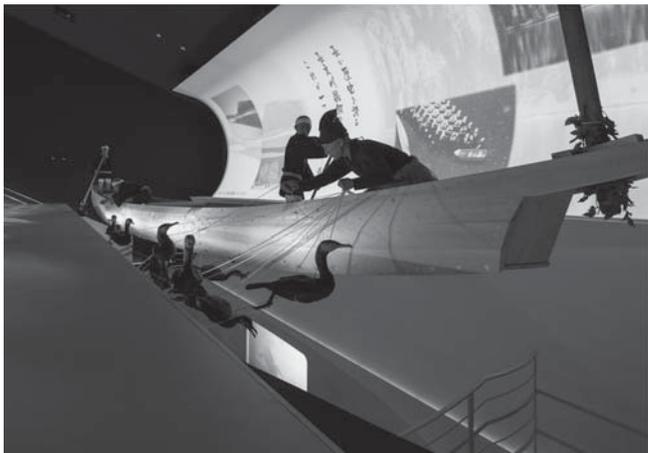
デジタル画像によるバーチャル体験背景スクリーン処理をなくしたクロマキー技術の開発(うめだ/ナレッジキャピタル)

## 2-4 メディアミックス展示

博物館への来館動機を誘発する「今だけ、ここだけ、あなただけ」にブランド性を構築し、集客を高める有効な展示手法としてメディアミックス展示が挙げられる。そこには仕掛けとしての獨創性、コンテンツ（内容ソフト）のオリジナリティ性等がプログラムされており、展示手法も映像、音響、照明、ジオラマ、ロボット等の多様なメディアがミックスされ、ストーリーの構成と展開に厚みを持たせている。



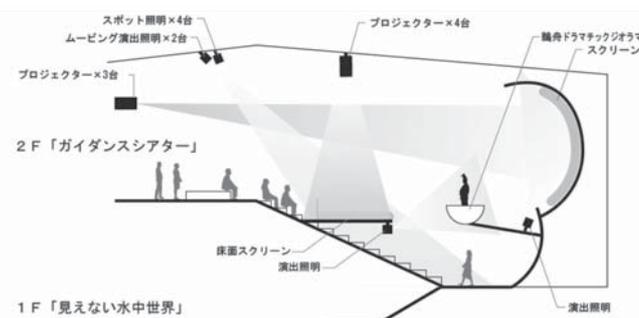
恐竜ロボット、動画映像、音響、照明等の様々な要素をシンクロナイズしたメディアミックス展示（北九州市立自然史歴史博物館 ーいのちのたび博物館ー）



長良川の鶺鴒の様子をジオラマ、映像、音響、照明等をシンクロナイズした展示（岐阜市うかいミュージアム）

### ■演出構成要素

ガイダンスシアター/長良川鶺鴒の世界「シアター演出」では、下記の演出機器とスクリーンを用いて、ストーリーを展開していきます。基本的なストーリーは、長良川鶺鴒の実写映像素材で構成。ストーリーに合わせて、ムービング演出照明等により、効果的に空間演出を行っていきます。



メディアミックスしたうかいミュージアムのガイダンスシアターの仕組み（岐阜市うかいミュージアム）

## 3.視覚や聴覚をはじめ、触覚、臭覚、味覚など五感に訴える体感型展示

来館者の参加行動が直接展示に働くことで、展示の意図や意味が明らかになる手法。展示者の意図した知識や情報が文字や言語によるコミュニケーションに加え、参加者の直接行為によって自覚、認識に至るとするコンテキスト（脈絡）を前提とする。科学の原理や法則、実物では伝えきれない天文分野の展示装置等に採用される例が多い。



沖縄こどもの国・ワンダーミュージアム



名古屋科学館 水のひろば（人力回転車とアルキメデスポンプ）

## 4.人と人とのふれあいを通して交流する展示（ヒューマンリレーション系展示）

展示の現場に楽しさやワクワク感を醸成するモチベーションは、展示物が大きな要因を占めるとされるが、情報化が高度に発達した現代社会においては、バーチャルなネット情報を内部に内包しつつ、リアルでライブな空間での体験情報のあり方が、印刷媒体や放送、通信媒体と異なる博物館固有の課題として取り組む必要がある。博物館展示は、見る者と見せる者、見る者と見られる者との間に双方向のコミュニケーション環境が成立しており、加えて五感全てによる体験情報に特色がある。そこに集い、交流する人々の体験感動の共有と拡大が博物館リテラシーを促進させ、博物館文化を根付かせる。博物館の魅力に社会に発信し、その展示をより魅力あるものとするには、リアルな空間でのライブな感動体験を人と人とのふれあいを通して醸成する環境づくりが求められる。



人と人との対話交流を通して展示情報がコミュニケーションされる  
(日本科学未来館)



ミュージアムシアター『お白洲』の実演展示(長崎歴史文化博物館)

**Shot 05 博物館に御奉行ご出座**

長崎に新設館 集客担い御白州の寸劇

「長崎に新設館 集客担い御白州の寸劇」の記者会見の様子。長崎歴史文化博物館の代表者が、新設館の集客戦略について説明している。

長崎歴史文化博物館は、長崎市の中心部に新設された。新設館は、従来の博物館とは異なり、展示だけでなく、体験型展示やワークショップなど、多岐にわたるプログラムを提供している。また、新設館は、長崎市の観光資源として、集客戦略を重視している。新設館の集客戦略は、長崎市の観光産業の発展に貢献している。

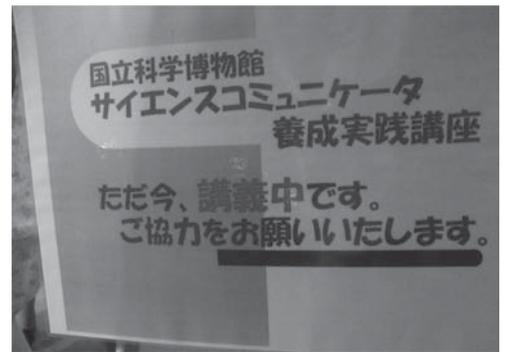
新設館の集客戦略は、長崎市の観光産業の発展に貢献している。新設館の集客戦略は、長崎市の観光産業の発展に貢献している。

■2005年12月2日(金)朝日新聞 夕刊

**ヒューマンリレーション系展示を担うコミュニケーターの育成**

展示が五感に訴える総合的なコミュニケーションメディアであるという特性をさらに発展させ、博物館体験を豊かなものにしようとする取り組みが盛んに行われるようになってきている。コミュニケーターと呼ばれる展示と来館者を繋ぐ人材の育成である。科学館であればサイエンスコミュニケーターであり、美術館であればアートコミュニケーターと言うことだが、その役割はネット社会でのバーチャルな情報環境に対してリアルでライ

ブなコミュニケーションの有効性と意義を社会化するもので、今後の博物館の発展、成長に大いに期待がもたれている。



国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成実践講座 光景

**情報環境の現在と博物館展示の今後の方向性**

**■情報環境の現在**

- ・現代は「いつでも、どこでも、誰にでも」の情報環境にある。一方、博物館の展示情報は「今だけ、ここだけ、あなただけ」の制約された環境にあると言える。
- ・しかも、博物館での情報は、多くの場合、古くて、既知のものが大半で、それらは電子ストックされたものが多い。
- ・それらの情報は、携帯電話などパーソナルメディアでいつでも素早く、手軽に呼び出せる。
- ・資(史)料の共有のあり方や研究に対する共創的な取り組みへの改善、改革が、成熟した市民社会における博物館には求められている。すなわち、学芸員や研究者らの構築した知見や学識を一方向的に享受し、そこで完結する受け皿型の博物館体験から、利用者自身が博物館の資料や展示を媒介に、自らの見方や考え、知見を積極的に発信し、創造する主体者となることが博物館に課せられた役割なのではないだろうか。

**■今後の方向性**

- ・博物館展示を変えるSite(場)とLine(ネット)とのコラボレーション。
- ・つまり、情報を豊富にもつ来館者らによる博物館展示のフォーラム化が進展する。展示空間が展示情報を介したディベートのインキュベーターとなっていく。
- ・ネット情報からは得られない博物館資料のオリジン(原物)に内蔵された新たな知見の発見、発掘の可能性が拡張していく。

## 研究部会開催報告

# 平成26年度 基礎部門部会第7回 研究会 開催報告

林 浩二 (千葉県立中央博物館)

テーマ：学芸員の養成に関するフォーラム  
～博物館と大学の連携による  
研究・人材養成拠点構築の可能性～  
日時：2014年12月21日(日) 13:00～16:30  
場所：千葉市科学館8階科学実験室A  
参加者：16名  
報告者：林浩二(千葉県立中央博物館)

基礎部門研究部会の平成26年度第7回研究発表会が、千葉市科学館で開催された。

全体司会は基礎部門部会副部会長の高安礼士氏(千葉市科学館)。冒頭、部会長の小川義和氏(国立科学博物館)から開催趣旨を説明し、次いで参加者全員で簡単に自己紹介した。

講演は、Viv Golding 博士(University of Leicester, UK、以下 Viv氏)による“100 Stories of Migration (百の移住の物語)”と、黒岩啓子氏(Learning Innovation Network)による「韓国と日本における博物館専門職員養成課程の現状と課題」の2題で、講演の後に休憩を挟み、討議の時間を持った。以下に概要を報告する。

### 1. 開催の趣旨(小川義和)

「社会のためのミュージアム」、「社会に根ざした、社会のための博物館学の検討 ～新しいミュージアム・マネジメント理論の構築のために」を3年間のテーマとして、その3年目を迎えている。

「社会に根ざした、社会のための、社会に働きかける循環型博物館学」を提案した(小川 2014)。それに従えば、本日議論する学芸員養成のところは「ガイドライン」に相当することになる。

本日は、英国と韓国で大学における学芸員の養成がどう行われているかの報告をいただく。さらに博物館が果たすべき社会的機能をふまえ、それを実現するための専門職員養成がどのように行われるべきか、議論を深めたい。

### 2. 百の移住の物語(Viv Golding, University of Leicester)

#### 2-1. 以下の構成で話を進める。

- ・レスター大学大学院における修士課程から博士課程への発展段階の概要
- ・レスター大学大学院における博士課程の課題プロジェクト

である「百の移住の物語展」(2014年6月24日～2015年2月13日)に焦点をあてる

- ・「百の移住の物語展」の英国およびオーストラリアでの背景解説
- ・より広い政治的世界の中での博物館の役割を検討
- ・アーティストと地域コミュニティがどのようにアイデンティティを構築できるか、またそのような関係がどんな利益をもたらすのかを問う

※ここで「移住」は、国外から英国への移民とともに、英国内での移住も含めて扱っている。この展示は過去60年だけを扱っているが、ヨーロッパでは「移住」の歴史は2千年に及ぶ。昨今の世論の移民への反感の高まりへの危機感が今回のプロジェクトを生んでいる。



Viv Golding 博士

#### ○移住博物館 (Talking Difference Immigration Museum, Australia)

<http://museumvictoria.com.au/immigrationmuseum/>  
文化的な違いについての対話を進めることで多様性を促進する狙い。

#### ○英国の移住博物館 (Migration Museum) オンラインプロジェクト

<http://migrationmuseum.org/>

英国移住博物館を設置するための準備段階として2011年に開設。

開設時にGuardian紙と共に「百の移住のイメージ」を募集。

参加者は英国へ、英国から、あるいは英国内での移住に関する写真・絵画・芸術作品と説明を応募。現在も閲覧者にコレクションの成長をよびかけ。

イメージだけでなくストーリーも重視。展示を見て、観衆には、移住はすべての人に関連しているというキーメッセージを持ってもらうことを意図。移民を「他者化」しないような枠組み。

- レスター大学大学院博物館学研究科ビル内の展示テキストの一部
- ・「百の移住の物語」は、レスター大学大学院博物館学研究科と英国移住博物館プロジェクトのパートナーシップの成果。
- ・ツイッターで #100stories を添えて誰でも対話に参加できる。

- ・「百の移住の物語」は写真コンテスト。
- ・博士研究員の展示チームがプロ・アマ写真家の双方から写真を選別し、博物館学研究科ビルで7か月展示する。
- ・写真に現れる物語に焦点をあてる。
- ・私たち自身の家族の家系の物語か、あるいはコミュニティに新たに加わってくる人々と関わるのか、私たちは誰でも移住の物語を持っている。
- ・これらの物語は、私たちの見方に寄与し、移住というトピックについての公政策立案や社会的議論を深める。

### ○5つの互いに関連するテーマ

- ・わたしの移住の旅 (My migration journey) 移住の理由
- ・わたしはどう適応するか (How I fit in) 移住者とコミュニティが互いのアイデンティティーを受け入れるか
- ・持って行く物 (One thing to take with me)
- ・はざまに生きる (Living in-between) 無国籍についての話
- ・誰でも歓迎 (Everyone is welcome) 移民が歓迎されているか否かの問い

### ○場外展示として、レスター鉄道駅、大学図書館など市内数か所で開催。

拡張現実 (AR) コンテンツで増強。

### ○映像作品 Here and Now (いまここで)

言葉は力を持つ。英国の政治家 Enoch Powell と「他者」(移民たち)の映像を組み合わせた、架空の対話の映像作品。

Enoch Powell (1912-1998) は英国下院議員 (保守党)。1968年4月20日に英国の移民政策を批判する演説「Rivers of Blood」を行い、大いに論議を呼んだ。反差別の立法にも反対する立場をとったPowellは影の内閣から追放された。

作品は、1960～70年代のニュース・クリップから構成され、自らの話を聞いてもらうためには戦わなければならなかった移民の物語を伝えるもの。

### 動画

<https://www.youtube.com/watch?v=wHwDPTJud5Y>

### ○プロジェクトについて、作品やインタビュー動画などが以下のサイトで閲覧できる。

<http://www2.le.ac.uk/departments/museumstudies/exhibitions-and-events/100stories>

<http://www2.le.ac.uk/departments/museumstudies/exhibitions-and-events/100stories/here-and-now-film-installation>

<http://www2.le.ac.uk/departments/museumstudies/exhibitions-and-events/100stories/interviews-and-videos>

## 3. 韓国と日本における博物館専門職員養成課程の現状と課題 (黒岩啓子, Learning Innovation Network)

### ○はじめに

アジアにおける博物館専門職員の養成について研究を進めており、昨年は「韓日博物館交流協力と博物館経営マーケティング」という国際フォーラムに出席し、日本の大学における専門職員養成課程について発表した。韓国側からも同様の発表があった。その内容を踏まえて、その後調査した内容を加えて報告する。

### ○日本の博物館制度の発展

1946年 日本国憲法

1947年 教育基本法

1949年 社会教育法 (社会教育機関として博物館を規定)

1951年 博物館法

当時200館程度、現在5,700ないし6,000館。

2005年 中央教育審議会「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」(諮問)

2006年 教育基本法改正

2008年 中央教育審議会「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～」(答申)

p.46 (学芸員等の在り方)

博物館に置かれる専門的職員である学芸員は、資料の収集、保管、展示、調査研究、教育普及活動等の多様な博物館活動の推進のために重要な役割を担っており、今後、博物館が人々の知的関心に応える地域文化の中核的拠点として、人々の生涯学習の支援を含め博物館に期待されている諸機能を強化していく観点から、学芸員及び学芸員補の資質の向上が重要であり、その養成及び研修の一層の充実が求められている。

2008年 博物館法改正

(期待された抜本的な改正は行われなかった)

2009年 博物館法施行規則の一部改正

(8科目12単位→9科目19単位に変更)

各科目15回の講義では十分な内容は伝えられない。

博物館学を扱う大学院研究科は国内30校ほど。しかも、博物館学に特化しておらず、美術史や考古学の大学院の中に博物館学も含まれる程度。教員の専門分野も美術史、考古学などで、博物館学は少ない。専任教員は少なく、非常勤が多い。→科目間の調整はしにくく、重複や抜け落ちが起こりがち。ファカルティ・ディベロプメントの検討、養成課程のトータルデザインという視点が必要。



黒岩啓子氏

## ○韓国の博物館制度の発展

1982 文化振興法

1984 博物館法（あまり機能しなかった）

1991 博物館および美術館振興法（促進法という訳語もある）

2000 同上、全面改定

登録博物館には常勤学芸員が必要

学芸員士取得のためには学部ではなく専門課程に進学する人が多い

学芸員士の資格説明制度始まる 1級・2級・3級・準学芸員士

※韓国では博物館と美術館は別と考えているらしい。

※韓国では、日本でいう大学は「大学校」と表現され、一方、「大学」というと、大学の学部や短期大学、高等専門学校、専修学校をさす場合もあり、言及するものがどれに相当するのかわからない。

## ○韓国の個々の大学の博物館課程の名称・発展例(略)

名称の変更、学科の移動が激しい。

## ○韓国の博物館専門職員養成課程の課題

- ・教科課程が不十分 (ICOM勧告のガイドラインに達していない)
- ・博物館学の専門教授陣がほとんどいない
- ・教員の多くは博物館学専攻者ではなく博物館学芸分野専攻者
- ・「博物館学」の専門性が低く見られている - - 日本でも同様。
- ・4年制学部課程には博物館学科を開設する大学がない。

## ○日本と韓国で共通する検討課題

- ・博物館学に関する研究者の増加 → 博物館学を専門とする教授陣の増加へ
- ・国際的な基準に則した専門教育課程の制度設計
- ・博物館専門職員として高度な専門知識や経験を獲得するためのトレーニング

## 4. 討論

### ○社会的課題と博物館

- ・アメリカのスミソニアン協会では基本的に国策に基づく展示方針・活動方針で運営されていると見える。
- ・日本の独立行政法人の国立博物館は、政策に基づき業務を行うことになっている。一方、大学では自由で多様な研究が許される範囲がある。大学博物館、民博・歴博は大学と同様の自由さを持っているだろう。
- ・公立館では多少とも自治体の政策の影響を受けうる。
- ・日本の地域の公立館で社会的な課題を扱うのが少ないのは、学芸員の意識が乏しいのではなく、学芸員の立場が弱いからだという認識がある。
- ・レスター大学大学院での事例はViv氏とPhDの学生たちのプロジェクト。レスター大学大学院博物館学研究科には展示委員会があり5年間の展示計画を検討する。英国の法システムでは「差別」は容認されない。差別を助長する展示は当然できないが、それ以外、特に制約が多いわけではなく、たとえば女王への揶揄も容認される。公立館では館長と展示チームが方針を決める。論争を呼ぶような展

示をあえて選ぶ傾向が強い。博物館が討論の場となることを意識している。

- ・日本でも市民と科学をテーマとして、博物館を討論の場とする試みは始まっている。しかし多くの公立館では、わざわざ論争的なテーマをとりあげ、博物館を討論の場にしようとはしていない。
- ・公害資料館等のように、日本でも社会的な課題に直接取り組もうとしている館は少数ながらある。
- ・公害問題に冷静に取り組めるようになるのに時間が必要だったのかもしれない。一方で時間が経つにつれ、直接の体験を語れる人が減っていくという課題もある。
- ・地域の博物館では、観光振興としての博物館という側面は無視できない。伝承が「漂白」され、悲惨な面がみえなくなることも。それはそれで地域の判断。
- ・論争を呼ぶ展示を避ける理由の一つは、館外の、たとえばマスコミなどの共催者への遠慮がありうる。
- ・Viv氏の印象としては、日本の博物館に、議論を呼ぶような社会的な展示は少ないように思える。日本人の控えめ、親切という国民性によるものかも。美点でもあるが、グループ (social group) として見がちで、個人でどう考えるか、という方向には向きにくい。和を意識することで painful history に向き合いにくいのかも。



会場のようす

### <学芸員養成課程>

- ・文部科学省の社会教育課の枠の中にある限り、博物館法の改正は、あれで精一杯という見方も。
- ・博物館は社会教育の機関であるという規定は重要。博物館職員の意識不足を感じる。
- ・韓国では大学設置法に図書館と博物館が必置。大学は地域の文化財保護の担い手として機能してきた。韓国の大学が求められているものは日本とは異なる。
- ・教育学そのものの問題。論争を呼ぶ教育活動を行うのは博物館だけでなくよいはず。
- ・イエス・ノーを問うことを避けるやり方になりがち。
- ・イエス・ノーを問うことより、なぜなら、という理由・説明が大事なはず。理由を問うのがなおざりなのは問題。
- ・残酷な結末の童話が、日本に輸入される際にハッピーエンドに変わってしまうということも考える必要。
- ・博物館教育から哲学が抜け落ち、ハウツーだけが横行するのは困る。

議論は多岐にわたり、予定時間を超過したため、部会長が締めくり、研究会を終了した。

## 研究部会開催報告

### 平成26年度 基礎部門部会第8回・近畿支部会第2回 合同研究会 開催報告

江水 是仁（東海大学課程資格教育センター）

テーマ：ミュージアムの最前線における学びと創造性

日 時：平成27年1月11日（日）

13：30～16：50

会 場：国立民族学博物館第4セミナー室

報告者：江水是仁（東海大学課程資格教育センター）

国立民族学博物館を拠点とする日本学術振興会研究拠点形成事業（B. アジア・アフリカ学術基盤形成型）「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」による特別講演会「ミュージアムの最前線における学びと創造性」が、基礎部門研究部会平成26年度第8回研究部会と近畿支部会平成26年度第2回研究会との共催で、平成27年1月11日（日）13：30～16：50、国立民族学博物館第4セミナー室にて開催された。

今回の特別講演会は、総合司会に黒岩啓子氏（Learning Innovation Network代表・基礎部門研究部会・近畿支部会幹事）があたり、英国国立レスター大学大学院博物館学研究科ヴィヴ・ゴールドディング（Dr. Viv Golding）教授による講演会と、ディスカッションを中心として進行した。ゴールドディング氏は、カリビアン女性作家同盟との共同研究をもとに、博物館において「自己」と「他者」の理解をどう深められるかなどを研究されており、これらの研究成果をもとに、博物館教育の最新の動向を講演いただいた。

なお本講演はすべて英語で行われた。以下は当日の概要をまとめたものである。

#### 開会挨拶 吉田憲司氏（国立民族学博物館 教授）

国立民族学博物館を拠点とする日本学術振興会研究拠点形成事業（B. アジア・アフリカ学術基盤形成型）「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」（園田直子氏代表）のプロジェクトの一環である。本研究はアジアにおいて、その土地に根差した新しい博物館学を作り上げることが目的としている。

今回は、小川義和氏が代表となった、日本学術振興会外国人再招聘研究者事業「博物館と大学との連携による教育学芸員養成プログラムの開発に関する研究」により、ゴールドディング氏を講師として迎えることができた。国立民族学博物館（以下みんぱく）のプロジェクトとJMMAの共催が可能となったことを感謝申し上げます。

#### 開会挨拶 小川義和氏（国立科学博物館／日本ミュージアム・マネージメント学会 基礎部門研究部会長）

各方面の協力により、開催できたことをうれしく思う。今日の講演・ワークショップのキーワードはメモリー（記憶）だと思ふ。メモリーに関して少し個人的な経験を披露すると、みんぱくがある千里で、以前大阪万博が開催された。私のメモリーは、万博で展示されていた「人間洗濯機」をみて、科学に目覚める瞬間であったこと、そして迷子になったというメモリーが残っている。そのようなメモリーが残っている場所で講演会を開催できることを楽しく思っている。

参加者の自己紹介（20名、関係者含む）ののち、ゴールドディング氏よりの講演があった。

#### 【ゴールドディング氏】

最初に、「記憶」とは一体何なのか。ミュージアムはどのように「難しい」記憶や「難しい」歴史に対して、有意義な働きかけをするのか？仮に働きかけるとするならば、いったい誰がミュージアムの文化的遺産を所有し、権力や支配力の及ぶところはどこまでなのか。

このような複雑なミュージアムの意図を見てみると、私は物質文化に対してより能動的な学びの場に皆さんが加わるべきだと考える。そこで、私たちの体を通した学びである、具体化された知識について調べるために—特に記憶や、一般的に言われる五感とつながるために—英国でよく食べられるスイーツ（フォックスミントというキャンディ）を使ってワークショップを交えながら講演を進めていく。

まず私たちが世界中のあらゆるところを知ることは、感覚器官を用いて行われている。スイーツを食べる行為を通して、ミュージアム機関—誰が話をし、誰が話を聞くのか—で私たちの疑問に感じたことをアイデアとして固定させるために役立つ創造的な働きがあると考え。私はフェミニストの解釈学をするためにこのような活動を博物館の最前線で行っている。

私と共同研究をしている、ロンドン・ゴールドスミス大学のジョアン・アニム・アッド教授の活動事例を紹介する。彼女は英国におけるたった一人の黒人教授であり、1990年代からカリブ女性作家同盟に関する活動を私と共にしている。私たちは長い共同研究により、ブラックヒストリー月間中の、独自のプログラム活動事例を取り上げる。

グラスゴーリビングアーツ館長のアリソン・マクモラン

は、ミュージアムを対象とした活動の中で、感覚の強さについて、ケアホームに入居している老人との会話を記述した。彼は90歳になろうとする、バグパイプ演奏家で作曲家であるものの、部分的に音が聞こえず、完全に盲目であった。その人が作った曲を演奏し始めた。アリソンはどうやって作曲をしたのか、すでに曲が頭の中に出て上がっているのか、と聞いてみた。すると「私の心の中にある曲を聴いているのだ」と答えた。

今では私たちは記憶に関する感覚のルートを探究し始めている。例えば一袋のお菓子が、どのように五感を通して記憶を呼び起こせるのだろうか。袋に触れること、そしてその中から一つのお菓子を選ぶこと、選んだお菓子を近くで見ること、お菓子を包む紙がカサカサなる音や、食べる時のかむ音を聞くこと、お菓子の香りを嗅ぐこと、かつて食べたお菓子の味、子どもだったころのお菓子をめぐる兄弟とのやり取り、駄菓子屋での思い出などが出てくるだろうし、子どもだったころの自分とのコミュニケーションをすることができる。

では机にある英国のお菓子、フォックスミントを食べて実際にやってみよう!

(各自隣の人とフォックスミントを食べながら、お菓子にまつわる子どものころの話、外国で食べたお菓子の味の話などをしたのち、全員立ち上がって発言、シェアした。以下はシェアする時に出た内容の一部である)

- ・子どものころ、歯医者さんに行き治療を終えた時、お菓子もらった時のことを思い出した。
- ・冬は焼き芋屋さんで夏はわらび餅を売る人の後をついていった。夜になってもなかなか帰ってこないで、家族が心配していたことを思い出した。

など



### 【ゴールドディング氏】

甘いものに関する記憶についての話を続けよう。

フェリックス・ゴンザレス・トールという人は、日常生活品をもとにしたアートを創作した。彼の作品は「愛情と喪失」に関係している。

彼の「無題」という作品は、1991年エイズで亡くなったアーティスト仲間のロス・レイコックを表現している。この作品はロスが健康だったころの体重と同じ重さのお菓子によって作られている。この作品は、山のようになったお菓子を取っていくようにと来館者をお願いしている。積み重なってできているお菓子が来館者に取られ、作品が小さくなる過程を感じることで、病氣闘病中、体重が減っていったロスという人物に来館者は思いをはせることができる。

ゴンザレス・トールはもう一つ考えた。それは、この作品を展示している期間中、減っていったお菓子を山のように充填するという考えである。ここに、私たちは死をもろともしない、永遠の命を約束されたというアートをみることができる。この作品のもう一つ重要な特徴は、「バキ」（イタリア語でキスを意味する）というお菓子を使っていることである。バキというお菓子を来館者はとることで、もしかしたら来館者は許されないキス・ゲイからのキスについて話すだろう。

またアフリカ系カリブ人コミュニティの一員としてのジョアン・アナム・アッド自身の記憶や社会的記憶に影響を与えた長い歴史時代の話がある。その話とは、大西洋間の奴隷について、植民地時代、アフリカ人をカリブ海諸国のプランテーションの労働力として連れ出し、連れ出した先のカリブ海諸国で甘い砂糖を生産し、裕福なヨーロッパに住む人たちに送り出すという、忌まわしい三角貿易に関する事柄だが、そのような出来事に関して、ごくわずかなミュージアムでしか扱っていないし、まるで忘れ去られているようにも見えたと言っている。

このような状況に対し、私たちの歴史に対する異なった記憶は、それぞれの立場で、共同でデータを収集し、会話や対話を通して聞いたことや話したことによる解釈と理解をすることで、それぞれの立場に対してお互い敬意を表し、未来に生きる我々にとって新しい解釈の可能性の寛大さを示している。

実際、ジョアン・アナム・アッドは、「黒人の女性…母性の姿」という展示を見た。そこには、一人の女性が乳児に母乳を与えている間、おんぶをしている二人の乳児をあやしている木像があった。彼女は力強くその姿を見ていた。なんとさまざまな仕事を同時にこなしているのだろう!しかし「母性の姿。木製。19世紀ナイジェリア」と書かれた展示ラベルには、より多くの奴隷を生み出す人間の容器として黒人の女性が扱われていた時代の奴隷時代の歴史に関連する説明書きがあった。これを見た彼女は、次のような詩を書いた。彼女の朗読でその詩を聞いてみよう。(実際以下の詩が会場に流れる)

アシャンティのスツールをまとった女性の母らしい姿とは  
木製の子どもの像に乳を与えること-静かに-息をすること-もう一回  
私たちがよく知っている違った女性の母らしい姿とは

子どもがいないのに乳を与えることである 子どもはいなくなつたのだ  
 売られてしまったのだ 木製の母の像は—いまだに—とても憔悴し、うちひしがれた  
 ストールのない、まるで石のようだ

石はストールではない  
 このように困難な場所には安楽なところはない 休息もない  
 肉体は姉妹 夫 子どもから切り離され  
 ここにはいない年長者の知恵でさえ 盗まれたのだ

ストールなしにどうやって料理を作る?  
 神酒やパーム油のピリツとする記憶を知らずに  
 ポットの中にある蒸留酒にどうやってコショウをつぶすのか?  
 この場所では 人間の心はただの石にすぎないのだ

かすかな かすかな反響は  
 ブードゥン ブードゥン、ブードゥンという音をたてた  
 木製の子どもの像はいまだに硬いままである  
 この石のある場所では母らしいものはなにもない  
 ない ない な——い!  
 石に向かって叫んだ  
 石全体に叫び声が貫いた  
 静止した 木製の女性の母らしい姿

彼女の詩は「権威化された」遺産に対する、共同的な抵抗として生じたものだ。私たちは横断的に人種、階層そしてジェンダーの境界線についてオープンに対話を重ね、資料を扱った後で新しい解釈を生み出している。彼女の詩は、ミュージアムや彼女自身により異文化の国々に翻訳されている。彼女は大西洋間の奴隷のやり取りによる悲劇的な共同体の歴史とともにアフリカのミュージアムの資料の歴史として登場した。彼女の詩は、ノーベル賞受賞者であるトニ・モリソンが愛した文章であり、奴隷時代に大量虐殺され、死んでいった人々を祖先に持つ推定6000万人以上に及ぶ奴隷となったアフリカ人たちによって新しい観点をもたらす教科書として賞賛された。彼女は我々に新たな知識—奴隷として生きた人々の記録に残っていない思想や感じたことを創造的なやり方で表現された置き土産—をもたらした。

次に創造的な事例を紹介する。

南ロンドンにおける世代間交流を深めるために高齢者の創造的記憶作業を行っている施設がある。ここでは世代間のドラマが生み出されている。

世代間交流は、高齢者の「知識の担い手」として、資料の様々な情報を共有することができるだろう。ミュージアムと若年層は、資料に対して何の経験ももっていないからだ。

実際に、ある高齢者が子どもの時の冒険をした地図が示されている。この地図は記憶を刺激した。その地図には子

どもの時の友情を思い起こさせるために、心に浮かんだことも描かれている。この地図を書いた人は子どもの時、その地域の搾乳場でえさを与えていたノルウェー人の友達を思い出し、こう記述した。  
 「彼女はノルウェーに戻ってしまった。それ以降私は彼女を見たことがない。」

早速ここで実践してみよう。実際に行ったリンダ・サージェントの観察では、  
 ・私たちの両手は過去の実体と関連している。過去の実体は、現在憧憬として機能している心は忘れられた多くのつながりを表すものとして資料に関する活動によって記憶を呼び起こすことができる。  
 と言っている。

二人一組となってお互いの手のひらをA3の紙に交替で描いてみよう。手のひらを描くことで文章の枠組みを詩的に作ることができる。「私の手は…」という枠組みができれば、簡単に話すことができるだろう。  
 (実際にA3の紙に両掌を描く作業を行った後、実際に「私の手は…」という枠組みで参加者全員が発言した。以下はその一部である。)

- ・私の手は展示を読むこと、握手を通して多くの人とコミュニケーションをとること。
  - ・私の手は図面を書くこと、ミュージアムの資料を集めるために手をつかっている。私の父は戦前銃を握ったことのある手であろうが、若い人たちには手に銃を握らせたくない。
- など

異なった歴史を持つカリブ女性作家同盟との創造的な協力により私に提供されたミュージアムの最前線におけるフェミニスト解釈学について考えてみた。最終的に英国のミュージアムと、とりわけ地方のコミュニティ両方の有益な、トニ・モリソンの言葉、過去の「再記憶」と協働する必要性をここで紹介した。

重要なのは、

- ・日常的な会話の中で、尊敬の念を促進し活動的に耳を傾け複雑な考えを話すこと
- ・心にとどめるという領域まで発展を広げ、ミュージアムの最前線と私が定義した新しい活動を地域で創造することである。

休憩をはさみ、質疑応答があったが、文字数の都合上割愛する。

支部会だより  
北海道  
支部会

博物館がもたらす地域への経済効果  
—北海道支部ミュージアムマネジメント研修会報告  
中島 宏一（北海道支部幹事・一般財団法人北海道開拓の村）

平成26年度の北海道支部ミュージアムマネジメント研修会は、同年10月2日（木）、3日（金）の2日間にわたり、藤泉氏（元長崎県文化スポーツ振興部長）を招聘し、長崎歴史文化博物館（以下、「歴史文博」）、長崎美術館（以下、「県美」）の経営戦略を事例とした「博物館がもたらす地域への経済効果」について、講演とディスカッションを開催した。

会場はかつて炭鉱で栄えた三笠市が運営する市立博物館で、同市が推進する「三笠ジオパーク」で博物館周辺のジオサイト見学会を併せて行った。

### 低迷を続ける北海道の財政

北海道の財政状況は芳しくない。

北海道の年間GDP（道内総生産）は、かつては21兆円であったが現在では18兆円、域際収支は1.6兆円の赤字、国の交付金や支援で埋めているのが現状で、いつ財政再建団体になっても不思議ではない。

北海道が財政立て直しプランを作成したのは今から11年前の平成16年8月、さらに同17年度には同26年度までを計画期間とした新たな行財政改革の取り組みを実施し、緊縮財政を強いてきた。この間、博物館・美術館には利用料金制度、指定管理者制度が導入され、施設運営のコストダウンを図ってきた。

人口減少も大きな課題だ。

北海道の人口は現在約550万人。そのうち35%が札幌市でおよそ190万人。近隣の江別、石狩、北広島市を併せると220万人で、およそ40%が札幌圏に集中している。2040年には北海道全体で414万人まで人口減少すると推測され、札幌市だけでも全道の40%を超えるといわれている。

道内には179の市町村があるが、そのうち147の市区町村で子どもを産む中心世代の20～39歳女性が2010年から40年までに50%減ると予測。これらの自治体は地域の人口再生産力を失い、将来消滅する可能性がある。都市部も例外ではなく、札幌市内2区、旭川、函館両市などが含まれる。※日本創生会議 H26.5発表「消滅可能性自治体」の試算。

人口減少に輪をかけるのが高齢化だ。札幌市でも平成27年度には25%、同37年には30%と3人に一人が高齢者となる。

人口減少は税収の減少、公共サービスや社会インフラの水準を低下させる。この影響を直接受けるのは博物館であ

ることを私たちは学習している。さらに、指定管理者制度を導入し、利用料金の増減が博物館運営を左右する施設は生き残りをかけた戦略の見直しが急務だ。

社会教育分野では「新しい公共」に基づく官民協働型社会の形成に取り組んでいる事例を各地で見受けられるが、ミュージアムは施設という「器物」にあり、その老朽化に伴う改修まで「民」が請け負うとすれば大いに疑問だ。

社会情勢の変化がもたらす博物館運営への影響予測、施設の存在意義の確認は、設置者たる行政が担うものであり、それは内外に発信する確立したミッションで確認され、そのミッションを裏付けるのが十分とはいわないまでも財政的な支援である。

悲観視される将来の北海道を真摯に受け止め、私たちはミュージアムがこれからどうあるべきかを考えていかなければならない。

そこで、今回の研修会は我が国で最も早く指定管理者制度を導入し、ミュージアムを政策として位置づけている長崎県の事例「長崎モデル」で現場の最前線に立つ学芸職員が刺激をもらおうとしたわけである。

### 長崎モデル

指定管理者制度の導入した成功例として取り上げられる歴史文博と県美の運営は、本学会をはじめ公益財団法人日本博物館協会の大会や機関誌等で藤氏が紹介しているので会員には熟知していると思う。

「藤さんのような方がいれば、北海道の博物館・美術館は大きく飛躍するだろう」

参加者の声だ。良しも悪しも、設置者が博物館・美術館のことをよく理解している、生んだ子をきちんと面倒みることがうらやましいのであろう。

長崎県では文化行政が重点施策として位置付けられ、そのミッションとして美術館、博物館が明確に位置づけられている。その裏付けとなるのが、金子長崎県知事の県政評価で「県美術館や長崎歴史文化博物館などを整備した」が評価できる点のトップになったことだ。両館が県民に親しまれ、利用されているかを示すものだろう。

また、長崎県では行政が指定管理者に運営を丸投げしていないことだ。

歴史文博、県美、そして一支国博物館から毎日運営報告（入館者、売上額、イベント開催状況等）がなされ、毎

週行われる施設との定期協議等を通じ、週間での目標達成状況の把握、各事業の進捗状況、トラブル対応等の危機管理、展示・普及事業の企画立案等施設運営全般にわたる情報が共有化されている。ガバナンスとミッションが実行されているわけだ。

もともと、政策の中に博物館・美術館がきちんと位置づけられることで、政策評価の対象となり、ノルマが施設運営者に要求されることになるが、政策の一つに博物館・美術館が明確に位置づけられることは現場サイドには精神的な支えにもなる。

次に地域に及ぼす効果と経済波及効果が検証されていることだ。

歴史文博、県美とも、開館後から今まで県の負担金に差異はなく、両館のもたらす経済波及効果額が試算されている。これも県の政策の一つだからだ。

一方、北海道はどうか。

野外博物館北海道開拓の村（以下、「開拓の村」）を事例にあげると、管理委託期の平成17年度と比較して、同18年から21年度までの4年間の単年平均では約6100万円減額、さらに22年から26年度の単年平均はさらに1600万円減額、一年限りの指定管理期間であった平成26年度はさらに280万円減額であった。今春からは、施設内の飲み物自販機が北海道直営となり、自販機収入も見込めない。

開拓の村の利用者数は年間約13万人。最近では外国人観光客が多く見受けられる。このうち、利用料金が免除される65歳以上と小中学生、高校生の修学旅行利用が半数以上を占め、指定管理者の実質収入源となるパイは非常に少ない。指定管理者のインセンティブがなかなか発揮できないのが現状だ。

藤氏は言う。

「多分にこれまでの施設運営は社会教育施設としての施設管理の発想しかないと思う。この発想を変えない限り、指定管理者制度は生かされない。また、ミュージアムの地域づくりとしての活用・発展はないだろう」「施設運営は指定管理者の問題だと認識されているが、とんでもない。行政側の政策位置づけ、制度設計、ミッションの明確化、設置者と指定管理者との間では、リスク分担、ミッション、インセンティブ、そしてコミュニケーションが明確でないと指定管理者の力は発揮できないし利用者のためにもならない」。

さらに、地域活性化に貢献するミュージアムであろうとすれば、そこに求められるのはミュージアムの政策とそのミッションを達成しようとする強い意志と行動力が要求される。今、「政策と明確なミッション」「総合的なマネージメントとマーケティング」「多様な波及効果とその認識」「事業評価」「地域との連携」がミュージアムマネージメントに求められ、これらを実践することにより、社会へ積極的な情報が発信され、人を呼び・集め・都市の機能の一つとなっていく、とも言う。

長崎県の指定管理者導入の制度設計に直接携わった藤氏の経験と自信漲る講演に、参加した学芸職員は刺激を受けるというより、別世界の話を聞いているようであったことは否めない。

### この春にオープンする北海道博物館

約2年間にわたって改装工事を行ってきた北海道開拓記念館（以下、「記念館」）が、本年4月18日「北海道博物館」としてリニューアルオープンする。石森秀三館長の陣頭指揮の下、数多の学芸員の英知を結集し昼夜を問わず新生ミュージアムづくりに取り組んできた結晶が道民に披露される。

利用者数目標値年間約10万人は私が勤務する指定管理者（一般財団法人北海道開拓の村）に課せられている。



北海道開拓記念館石森館長と藤氏  
(中央の2人)

今、記念館と当法人では頻繁なコミュニケーションを重ね、目標値達成と道民に開かれたミュージアムに向けて日夜戦略を練っているところである。

### 三笠ジオパーク

ここで、今回の会場となった三笠市が推進するジオパーク事業を紹介したい。

北海道では「洞爺湖有珠山」「アポイ岳」「白滝」に続き、平成25年「三笠」と「とかち鹿追」が加わり、道内のジオパークは計5か所となった。

三笠市が日本のジオパークとして認定された理由は次のとおり。

- ①化石や石炭、地形などから北海道の大地の生い立ちを体感できる見どころが多くある。
- ②炭鉱遺跡群などが現存し、石炭とともに歩んだ人々の歴史に触れることができる場所である。
- ③充実した博物館のほか、ジオツアーを通じてジオパークを楽しめるようになっている。

アンモナイトが海を泳いでいた1億年前から炭鉱の町として栄えた近年まで、1億年時間旅行が気軽にできるのが三笠ジオパークである。三笠ジオパークには多数



ジオ弁のホタテはアンモナイトをイメージしている

の見どころとなるジオサイトを指定し、「野外博物館エリア」をはじめ計6つのエリアをジオサイトとして区分している。

ジオパークは地域外からの誘客の柱、つまり観光資源として据えている自治体が多いようだ。三笠市商工観光課では小樽や富良野の観光客を強く意識し、交流人口を増やして経済効果を出していく計画だ。修学旅行の誘致を目指しつつ、「地層型のご飯」を取り入れた食べて学べる「ジオ弁」も開発している。

支部会だより

東北  
支部会

平成26年10月28日開催東北支部会

『災害と展示の研究会』開催報告

福島県立博物館 佐治 靖氏『リアリティと震災イメージ』

佐藤 泰(仙台市生涯学習課)／渡邊 祐子(東北大学大学院 教育学研究科)

## はじめに ～東北支部会の活動について

JMMA東北支部は、運営体制の引き継ぎが検討されようとしている時期に、折悪しく震災に見舞われたこともあり、その活動には、震災をはさんでほぼ2年間にわたる空白期間を生じた。その後2013年11月より、震災を通じてミュージアムを考えなおす取り組みとして、災害・記憶・展示をテーマとするささやかな勉強会を、参加者をJMMA会員に限定せずに開始した。参加者どうしの情報交換、ゲストを招いての講話などを随時実施し、2013年度末には名称を「災害と展示の研究会」とした。会の概要はウェブサイト(<http://museum311.jimdo.com/>)を参照願いたい。なお東北支部としては、支部会の活動のひとつとして、この研究会に全面的に参加する形をとっている。

発足以来、9回の研究会が行われ、うち2回はゲストを招いての会となった。参加者それぞれが、文献、新聞記事など、災害・記憶・展示に関わる資料を収集して共有する作業を行いつつ、ゲストを招いて新たな視点を手にする活動を続けている。

2014年2月18日には、東北大学災害科学国際研究所の川島秀一氏をゲストに招き『津波常習地の生活文化』と題するレクチャーが行われた。三陸海岸の津波文化を研究した民俗学者、山口弥一郎の1943年の著書『津浪と村』を軸に、氏が取り組んできた津波碑文調査なども織り交ぜながら、津波地域特有の生活文化の諸相が語られた。続いて10月28日に、はじめての公開研究フォーラムとして行ったのが以下に紹介する講演である。演者の佐治靖氏は、福島県立博物館で民俗学を担当しているが、震災後、被災地をめぐる独自のフィールドワークも行っている。

## 1. 震災をめぐる視点

『リアリティと震災イメージ』と題した本講演では、東日本大震災をめぐる震災理解と支援について、佐治氏が民俗学・人類学的視点から被災地において実施した調査研究により明らかとなった課題を通じた問題提起がなされた。とりわけ、外部の人間やそこで生活する人の現実理解や、津波に集約されるようなメディアの膨らんだイメージの問題が、1)地域的、専門的、主観的な「震災」理解の問題、2)記憶と記録、その視点と方法、3)東日本大震災という〈時間〉に対するとらえ方のちがひ、4)実際の被害の多様性と地域性、といった具体的な視点から問い直された。これら

の視点は、様々な支援と被災者の隔たりを明確にするもので、徐々に曖昧になってきている被災者はだれなのかといった問題を明らかにし、被災者/被災地域の生活世界のまなざしから、東日本大震災を記憶することに挑むものである。

はじめに、講演では、東日本大震災にかかるいくつかの展示・展覧会を例としてあげながら、主だった展示とその中身について言及がなされた。

- ・「地震海鳴りほら津浪2011  
～三沢の漁業を襲った東日本大震災～」  
三沢市立歴史民俗資料館  
平成23年9月11日(日)～平成24年3月11日(日)
- ・「震災からよみがえった東北の文化財展」  
東京都立中央図書館  
平成24年2月26日(日)～3月11日(日)、  
遠野市立博物館 平成24年3月16日(金)～3月28日(水)
- ・企画展「記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産—」  
国立民族学博物館 平成24年9月27日(木)～11月27日(火)
- ・人間文化研究機構連携展示  
「東日本大震災と気仙沼の生活文化」  
国立歴史民俗博物館 2013年3月19日(火)～9月23日(月)
- ・「歴史にみる震災」  
国立歴史民俗博物館 2014年3月11日(火)～5月6日(火)
- ・「震災と表現」  
リアス・アーク美術館 2014年9月17日(水)～11月3日(月)  
「東日本大震災の記録と津波の災害史」(常設)  
リアス・アーク美術館

これらの主だった展示の特徴は、1)資料としてのがれきの展示、2)文化財レスキューで救い出した資料の展示、3)過去の資料を組み合わせた展示、4)特定の地域に限定した展示、5)直接被災した者でない人が作家としてイメージをつくりあげた展示、などである。これらの展示や展覧会は、東日本大震災をテーマとしながらも、かなり限定的なテーマを扱っている点に共通する特徴が見られる。

## 2. 東日本大震災と主要概念の見直し

東日本大震災の場合、展示や展覧会からも、津波やが

れきというものが象徴物として扱われ、地震や津波、火山噴火や異常気象などの自然災害が、生活と切り離されて考えられがちであることがわかる。この問題について、人間の暮らしから災害を考える、災害人類学的観点から、「自然災害」とは何かをもう一度確認する必要があるだろう。

自然災害は、単に自然の要因だけではなく、その被害の規模は、人的要素を多分に含んでいる。たとえば、災害と近代以降の開発との関連性や、人間生活に優位な西洋的な自然観から自然災害を見つめ直すと、自然災害がいかに人間生活とのかかわりによる災害なのかがわかる。また、この理解をふまえて災害における「復興」という概念を確認してみると、復興の概念自体が、従来とは異なるものとなってくるのがわかる。従来は、津波によって破壊された道路、海岸、施設などの整備と新たな防災など、復興はハードの復興とソフトの復興を意味していたが、近年では、復興は、被災者の生活の復興を意味するようになってきている。復興概念の中に防災計画を含めた人の暮らしがふくまれるのは、近年にみられる変化であり、概念の拡大を指し示すものである。

このように、「自然災害」や「復興」といった概念を今日的な理解においてとらえ直すとき、支援活動とボランティアの特徴について考えることは重要である。東日本大震災の際、寄せられた支援のなかには、学術的支援も多く含まれていた。これらは主に、1)地域の人たちの生活を客観的に理解するものと、2)民俗芸能の道具や場の援助するものに大分することができる。しかし、これらの支援の諸相には、復興と支援活動のさまざまな課題が散見する。

たとえば、東日本大震災における学術的支援の特徴から見える課題のひとつに、被災者ニーズと支援の押しつけがあげられる。これは、多くの大学が、授業の一環として被災地を訪れ、被災地とかけ離れた大学内での評価を行うことを目的としながら、一過的で長いかかわりを前提としない支援活動をおこなうなどの動きにあらわれている。学術的支援の中には、外向けの成果と地元での反省という、うちと外で異なる自己評価をするものも見られるが、被災者には同じ支援として映ることも問題視される。またふたつの特徴的課題としては、「金をおとす」被災地観光があげられる。このような経済的な支援としての観光の問題は、実際に仮設住宅で暮らす人々にとってこのような経済支援がどれほどの効果を持つのか疑問が残る点にある。これらの支援の諸相からは、支援に携わった人たちは何を見てきたのかという問題が浮き彫りにされるだろう。

### 3. 支援の中身

さらに、東日本大震災をめぐる学術的支援で行われてきたことの中身を見ると、それは、主に、民俗芸能の復活と、文化財レスキューのふたつに集約される。ひとつめの民族芸能に関していえば、東日本大震災を機にたくさんの民俗

芸能が発見され、再認識、再評価にともない、支援や出張公演が増加した事例があげられる。またふたつめの、文化財レスキューに関していえば、行政ではなく、個人的なつながりからはじまる支援の動きがみられた。この文化財レスキューの動きをより詳細に見たとき、支援をめぐる地元と外部との調整が、むしろ障害となったことから、システムティックな動きに対し、個人での判断動きが震災のなかで支援につながることが示されたといえる。さらに、作業が進むにつれて見えてきた課題として、資料と遺品のちがいが—資料として何を救出し、なにを廃棄し、どこまで修復するののかの問題が浮上し、支援に関して個別なところに目を向けていくと、かなり多くの課題を孕んでいることがわかる。

このような、学術的支援の動きからみられる課題を考えてみても、福島の実況には特殊な課題がみられる。それは、自然災害と原発事故をうけた福島の現状では、原発事故が災害を大きくし、多様なものとしている点にある。この、震災以後の被害の地域性と多様化は、東日本大震災の地域による生活のちがいを明白にするもので、ひとくりにできない地域差を顕著に表わすものである。それは、いまだに終わらぬ震災、復興の実感のなさ、先が見えない現実として、被災者の前に現前する原発被災地域での悪循環—時間だけたくさんある避難生活を特定の地域にもたらす要因となっている。東日本大震災ということばでは理解できない、多様化した被災地を知ることはどういうことなのであろうか。被災者の生活をわたしたちはどれくらいみているのか。支援をする、あるいは展示をするとき、被災者とは誰なのか考え直す必要がある。それは、支援が十分被災者という人々の被害を反映しているのか、あるいは、そもそも被災者はだれなのかをふまえた支援や展示を考えてゆく必要があるためである。

### 4. 被災地の暮らしを知ること

様々な支援が行われている中で、被災者がそれをどう必要としているのかという点で見たとき、支援の質が問題となってくる。まず、支援や展示に重要なのはニーズであり、避難の現場や、避難生活を送る人たちの視点に立つことだろう。そこでは、日常の行事など、被災以前の暮らしを見つめることで、変化する生活を見つめる見方が問われることとなる。この、「暮らしを知る」ための努力をどれほどしたかということが、押し売り・押し付けにならない支援活動に結びつくと考えられる。ここで改めて問われるのは、「フィールドワーク」の意味である。

がれきだけが震災を象徴するものではないと考えたとき、絶えず動く暮らしや、変化のある時間の問題によって震災が語られる必要があることがわかる。その中に、それぞれの課題がみられる。たとえば、展示を組み立てるにしても、東日本大震災の流れの中にある時間をふまえること、また、がれきに象徴される衝撃的な映像だけではなく、被災地の

人たちやそこでの暮らし、支援で関わる人たちを含めて震災を考えることが重要であり、生活の場に入っていないと見えてこないものがあることも明らかである。ここで見直されるフィールドワークは、聞き取り調査を吟味するような作業を経ながら、事実関係を再確認し、複数の人がどのような生活を送っていたのかを直接会って聴くことを通じて、暮らしをみるものである。とくに、絶えず動く暮らしを追う東日本大震災に関するフィールドワークでは、非連続的存在性を有する「仮の」生活から、被災者の実態把握を進めることが求められる。この「仮の」生活は、ある状況になれば生まれ、状況が解消されると消えていってしまうようなものであるために、記録し見てゆく必要がある。その時に、重要なのは、「私たちは忘れ去る」ということをふまえて、記憶と記録を考えることである。

さらに、震災を考えると、震災をめぐる「死」と「生」の現実を見てゆく必要がある。東日本大震災では、被災者以外の様々な立場の人が慰霊と鎮魂の儀を執り行った。しかしながら、そのような行いによって遺族が本当に救われたのかを考えると、亡くなった人への想いは簡単に断ち切られるものではないことがうかがえる。特に、東北地方の震災をめぐる「死」と「生」の現実を見つめる場合、地域に残る宗教文化—「口寄せ」などの視点から、死者と生者の関係性がもう一度見直される必要があるだろう。死者の認識は、時間や関わる人によって、死者・遺体・霊と使い

分けが行われ、価値観も違ってくるが、地域にみられる「口寄せ」にみられる宗教文化の存在は、東日本大震災と阪神・淡路大震災とのちがいであり、表立って見えないが、通常の支援や復興の政策よりも被災した人々にとって最も重要な問題なのである。

## 5. まとめ

講演から、自然災害は、自然の要因だけではなく、人間生活が深くかかわることが指摘された。また、被害の多様性を前提とした、がれきだけではない、客観的な資料を集めた吟味によってなされる、「震災」理解と「被災体験」理解への客観性の再認識が語られた。さらには、非連続的存在性を有する震災において、記憶と記録、忘れること、思い出すことへの留意、さらには時間軸と動的視点での「震災」理解の重要性が説かれた。これらは、災害をめぐる人間の治癒力、つまり必要なものを選択し、不必要なものを淘汰する人間の力や、経済的な価値はないが、そこで生きることの価値や周辺との関係性を強固にするような「在来知」など、暮らしを見つめなければ見えてこないものから「復興」や「支援」を考えることの重要性を明らかにするものである。今後、現実に即した震災イメージを明確にし、支援活動や展示がおしつけに終わらせないために、被災者とされるひとびとの生活がどのようなものかを正確に捉えることが重要となるだろう。

支部会だより

関東  
支部会

## 『第10回関東支部会エドゥケーター研究会』 開催報告

西 記代子

(徳島県立博物館文化推進員／英国イースト・アングリア大学博物館学科修士卒)

テーマ：『アイデンティティー危機時代における  
ミュージアム 多文化社会ロンドンから』

日時：平成26年12月5日（金）  
18：45～20：30

場所：東京都美術館 交流棟2階  
アートスタディールーム

講師：吉荒 夕記氏（博物館学・美学研究者、  
ミュージアム・コーディネーター）

参加者：42名

2010年1月の第1回から数え、10回目を迎えた今回の関東支部エドゥケーター研究会では、アイデンティティー形成

の観点から、グローバル化や多文化化の進む社会におけるミュージアムの役割や課題について、ロンドンを拠点にミュージアム・コーディネーターや研究活動をされている吉荒夕記氏にご講演いただいた。

まず始めに、吉荒氏は本研究会のテーマでもあるアイデンティティーに興味を持つようになった経緯について触れられた。きっかけは、このほど出版された新著の原型となった博士論文で取り上げた、南アフリカのミュージアムとの出会ったそうだった。今回はイギリスのロンドンを具体例としてお話しいただいたため、南アフリカのミュージアム情勢を詳しくお聞きすることはできなかったが、アパルトヘイトという人種

隔離政策を経て、イギリスと同じく多民族国家として歩んできた南アフリカの情勢を研究することは、ナショナル・アイデンティティーを考察する上で大変意義深いものようだった。そして、吉荒氏は参加者にも問いかけながら、ナショナル・アイデンティティーとはどのようなものであるかを説明された。

### ナショナル・アイデンティティーとは

アイデンティティーとは、単純に言えば、「自分が何者であるか」と問うことで明らかになり、ナショナル・アイデンティティーでは、「自分が日本人であるということはどういうことか」という要素が加わる。さらに、多角的に「自分とは?」と問うことが必要だという。それは、アイデンティティーが流動的なものであり、様々な状況によりその答えが変化するからだ。例えば吉荒氏は、自身が外国にいる時にはまず「私は日本人で〜」ということから自己紹介するが、日本では自分が日本人であることには触れないそうだ。それは、相手が日本人である場合、「日本人である」というアイデンティティーの一要素を共有しているためそれを説明する必要がないからであり、一方その要素を共有していない外国人が相手の場合はそこからの説明が必要ということだ。また、時代によっても内容は変わってくる。吉荒氏は、「比較的」単民族国家であり、外国との接触も限られていた明治時代までの日本では、日本人としてのアイデンティティーが確立されていなかったと指摘する。それを物語る例として、「お前さんの国はどこだい」という質問には、「日本」ではなく「江戸」などと答えていたであろう点を挙げられた。

ここで吉荒氏は、ナショナリズム研究で著名な社会学者であるアントニー＝スミス著『ナショナリズムの生命力』から言葉を借り、「遺産や文化的価値が『選ばれ』、『再解釈され』、『再構築』されることでナショナル・アイデンティティーは形成される」という解釈を提示された。そして、吉荒氏はこの解釈の中に、ミュージアムの機能との類似性を見出すという。それゆえに、ミュージアムがアイデンティティーの形成に何らかの役割を果たしているのではないかということだ。

### ミュージアムがアイデンティティーを育む役割

では、具体的にミュージアムがアイデンティティーを育む役割には、どのようなものがあるのか。吉荒氏は、次の3点を挙げられた。

- モノの提供：モノに備わる実体の持つ象徴の力でもって自分と繋がる。
- ストーリーの提供：モノに関連性を持たせるストーリーがあって初めて意味が生まれる。そして、意味を生成するストーリーによって、自分とモノの間にダイアログが生まれ、自己を形成していく。
- 他者との出会いの提供：ミュージアムに足を運び、そこを見学する主体性が、例えば他者とできた関係の中

で、「自分が日本人である」というアイデンティティーが備わっていることへの気付きに導く。

### ナショナル・アイデンティティーの危機時代

続いて、ミュージアムが上記の役割を期待されるであろうナショナル・アイデンティティーの危機時代について、イギリスを例にその原因と結果に分けて説明された。まず、ナショナル・アイデンティティーが危機に陥る原因として、以下の4点を挙げられた。

- 移民の増加：現在、イギリスの移民の割合は、全人口に対して1割程度だという。そして、ロンドンに至っては3割に達する。
- 4つのネーションの構成体であること：イギリスはひとつの国民国家（state）であるが、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの4つの地域から成っており、それぞれが違うアイデンティティーを持った国（nation）とされる。
- グローバリゼーション：グローバリゼーションが進むと、人、文化、経済が相互に動き、影響を与える。ミュージアムの運営にも影響を及ぼし、その例として、アメリカのアイデンティティーを携えてスペインに上陸したグッゲンハイム・ビルバオを挙げられた。
- 物事の変化の激しさ：物事に適応したり、物事が融合したりする時間的余裕がなくなる。吉荒氏自身の経験として、日本に帰国する度に浦島太郎状態に陥ったように感じ、「日本人としての自分とは?」と顧みるそうだ。そして、これらを原因とした結果は以下になるという。

- 衝突や不和
- ナショナリズムの台頭
- 「～人」としてアイデンティティーの混乱

実際にイギリスでは、違った人種、民族間で問題が常に起きていたり、ナショナリズムを前面に押し出したイギリス独立党が勢力を伸ばしたりしているという。

### ミュージアムにおける表象の変化、語りの変化

それでは、そのナショナル・アイデンティティー危機時代にあるロンドンの博物館では、どのような取り組みがなされているのだろうか。吉荒氏は、現在のミュージアムにおける表象の変化、また語り（ナラティブ）の変化を捉えるため、ロンドンの二つの博物館を事例に解説された。

#### 1. 帝国戦争博物館 —生きられた戦争博物館—

1917年に第一次世界大戦の記録を目的とし設立された帝国戦争博物館は、2013年1月、この大戦の開戦から100年目に当たる2014年の再オープンを目指して全面閉館し、1年半の時間を掛けて大改修を実施した。この大改修の中心となったのは第一次世界大戦の展示室だったのだが、改修以前の展示と一番大きく異なった点は、オーラル・ヒスト

リーを積極的に取り入れていたことだそう。それまでは展示資料自体に語らせるという手法を取っていたのだが、改修後には展示資料とそれに関連する証言を一緒に提示しているものが多くあるという。例えば、化学兵器のガスにより縮んだ皮手袋の持ち主と同じ戦争体験をした兵士たちの証言を組み合わせ、化学兵器が人間に及ぼした影響を実感させる、といった具合だ。

しかし、このようなオーラル・ヒストリーには主観が入っており、戦争のような客観的視点を重要視されがちであったテーマには、本来使いづらいものであるはずと吉荒氏は指摘する。それでもこの博物館が今回の改修でオーラル・ヒストリーを多く取り入れたのは、主観的視点から見ることで、イギリスがいかにして第一次世界大戦に突入していったかを、大戦を経験していない世代の観客が自主的に感じ取ることができる展示にしたかったからだろうと分析された。

そして、改修後のもう一つの大きな変化は、自文化中心の展示からの脱却であるという。それまで、あまり語られることなかったイギリスの他民族部隊や敵側の視点なども取り入れられた。当時のプロパガンダ展示では、イギリスとドイツの両陣営の情報を提示するなど、多角的に光を当てるようになった。また他の展示室では、まだ展示に反影されていない戦争はあるものの、イラク戦争で潰れた実際の車を使ったアート作品を展示するなど、様々な戦争の負の遺産にも触れる努力が見受けられるという。

このように、客観的視点だけではなく主観的視点（一つひとつの小さな物語など）も取り入れ、また自文化だけではなく多文化の視点も取り入れるという変化は、吉荒氏が形容した「グランド・ナラティブからの脱却」というキーワードで、ミュージアムに起こる一つの潮流として捉えることができるかもしれない。

## 2. 大英博物館 —『メッカ巡礼』展—

イスラム教徒にとって人生の重要イベントである聖地メッカの巡礼をテーマに、大英博物館が2012年に企画展を開催した。同じテーマの企画展としては世界最大規模だったそうだが、そこにはこの企画展を開催する重要な意義と目的があったという。それは、世界三大宗教の一つであるイスラム教を表象すること、イギリスにおいてマイノリティーであるイスラム文化を表象すること、そして政府をあげて取り組んできたソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）の一環としてマイノリティー・グループを博物館に取り込むことだったそう。そして蓋を開けてみると、入場者数は予想を超え、さらにターゲット層のイスラム系の人々も多く来場したという。この結果からすると、この企画展は大成功だった。

しかし、吉荒氏には疑問が残るという。それは、現代の多文化社会に実際に生きる人々のアイデンティティー形成に寄与できたかどうかということだ。今回の展示で、イスラム文化をある程度は表象できたかもしれない。しかし現実の社会には、それだけでは表象しきれない様々なイスラムの人々がいる。その例がイギリスのイスラム系移民2世3世であり、生まれも育ちもイギリスである彼らのアイデンティティーがメッカ巡礼だけで語れるはずはないだろうと説明する。さらに、国民の融合を目指す目標とは裏腹に、イスラム教特有の文化を全面に押し出すことで、「これは私の文化」「これは彼らの文化」という風に、イスラム系住民とそれ以外の住民の意識に分断を生む可能性もあると指摘する。あるグループに焦点を当てソーシャル・インクルージョンを図る手法は、本来流動的であるはずのアイデンティティーを固定的に語ってしまい、社会の溝を深める危険をはらんでいるという。こうしたところにソーシャル・インクルージョンの苦悩があるのかもしれない。最後に吉荒氏は、ミュージアム関係者にもソーシャル・インクルージョンの効果を疑問視する声があり、まだまだ課題があることを付け加え、講演を終えられた。

その後の質疑応答の場面では、ソーシャル・インクルージョンにおけるネガティブ面を問う質問があり、吉荒氏は一つの企画展で全ての要素を包括した多角的な展示の実現は難しいこと、そしてイギリスでもまだ手探り状態にあることを説明された。またその他の質問への回答として、イギリスと比べ日本は他者を語るケースが少ないことや、グランド・ナラティブからの脱却が起こっているのは民主化の動きの一環であることなども補足された。

以上、今回の研究会では、グローバル化や多文化化が進み国民のアイデンティティーが揺らぐ社会において、ミュージアムがアイデンティティー形成について果たせる役割、またその課題にも焦点が当てられた。程度の差はあれ、今後日本も多文化化が進んでいこう。そんな社会において、私たちがアイデンティティー形成の一助をなすために大切なことは、観客に多角的視点を提供しつつも、限られた期間やスペースでは全てを包括しきれないという認識を持つことなのかもしれない。そうであるなら、長期的計画を立て、常に評価や議論を重ねフォローアップをしながら、この課題への取り組みを継続していくことこそが重要なのではないだろうか。一参加者として、このような感想を持った。

支部会だより

九州  
支部会九州産業大学国際フォーラム  
「高齢社会における博物館の役割を考える」

緒方 泉 (JMMA九州支部長、九州産業大学美術館教授)



国際フォーラム広報チラシ

- 1 開催日時  
2015年1月18日(日)  
13:00~17:10(受付12:30)
- 2 開催場所  
九州国立博物館研修室  
(太宰府市石坂、西鉄太宰府駅から徒歩10分)
- 3 参加者  
32名(九州23名、中国1名、関西3名、  
関東4名、北海道1名)
- 4 内容(株式会社サイマル・インターナショナルに  
よる同時通訳有り)
  - ①13:00-13:10  
開会行事、フォーラム開催趣旨の説明
  - ②13:10-14:10  
講演「高齢社会における博物館の役割  
—英国・レスター大学の事例から—」

ジョスリン・ドッド (Dr. Jocelyn Dodd Ph.D.)  
(レスター大学大学院博物館学研究科博物館  
ギャラリーリサーチセンター長)

③14:10-14:30 休憩

④14:30-15:15

事例報告「長崎歴史文化博物館の概要と高齢者向け  
プログラムの事例報告」

竹内有理(長崎歴史文化博物館教育普及グループ  
リーダー)

事例報告「福岡市美術館の概要と高齢者向け  
プログラムの事例報告」

神保明香(福岡市美術館学芸員)

⑤15:15-15:20 休憩

⑥15:20-17:05

ディスカッション(ドッド博士への質疑応答、  
参加者からの事例紹介)

コメンテーター:ジョスリン・ドッド、竹内有理、  
神保明香

モデレーター:緒方泉(九州産業大学美術館教授)

⑦17:05-17:10 閉会行事

「日本のミュージアムのエヴァリュエーション能力の弱さ、また、イギリスと日本の、大学とミュージアムの関わりの違いを感じました。ミュージアムの価値を理解しつつ、医療、経済、社会学・・・などの専門の立場から研究している大学が、イギリスには多いのではないかとということが、ドッド先生の講演から垣間見られました」

「印象に残ることは、ドッド先生が言われた『博物館は高齢者にとって生活の一部になっているか』という問いかけです。私は、この問題は高齢者にとどまらず、社会全体の問題ではないかと思います。『博物館が、地域住民にとっての生活の一部になっているか?』これからの博物館に突きつけられた命題と思いました。今後『まずは博物館ありき』が認められる社会ではなくなるでしょう。そのためには、私の町の資料館・美術館も設置理念を再認識し、足場を固めなければならないと痛感しました」

「博物館における地域社会のコミュニティの一員としての役割について、その可能性の広さに気づきました。特に高齢社会に対しては博物館や美術館がイベントなどを開催し



ディスカッション風景

に関わるだけでなく、それを系統的に作り上げ、情報を公開するというまでを一連の業務ととらえる姿勢の大切さを感じました」

「ドッド先生は、ロンドンオリンピックでこれまでの街がなくなり、そして新たな街が生まれるという変化に博物館がどのように関わったかをお話しされました。博物館は『その街の歴史、記憶を伝えていく場』と考えられがちですが、日本も東京オリンピックに向けて、『それをもとに街を創造するための場』という役割について考えていかねばと思いました」

これらは、九州支部会が共催した国際フォーラム「高齢社会における博物館の役割を考える」を受講した皆さんの感想である。

生涯学習社会を迎えた現在、コミュニティにおける博物館の役割はますます重要になってきている。しかし、我が国の博物館界では具体的な方策を示せないままの状態が続く中、直近の社会教育調査では前回と比較し、博物館来館者数が300万人減少するという報告がなされた。

こうした状況を打破する契機を作るため、学芸員養成課程を有する九州産業大学は、JMMAをはじめ我が国の博物館関係団体等と協力し、昨年度から海外の博物館研究者を招き、博物館事情を学ぶ国際フォーラムを開催している。

今年度は博物館学部、大学院に博物館学研究科を有し、日本からの博物館関係者の受入れも多い英国・レスター大学から大学院博物館学研究科博物館&ギャラリーリサーチセンター（RCMG）長のジョスリン・ドッド先生（東京で1月13日～16日まで開催されたMuseum2015で来日）を招聘し、「高齢社会における博物館の役割」をテーマに、九州支部会と共催して国際フォーラムを開催した。

フォーラムは前半が、ドッド先生からセンターが進める「認知症高齢者」を対象としたプロジェクトを中心に紹介があった。その後、レスター大学大学院を修了している竹内有理氏（長崎歴史文化博物館、JMMA会員）と神保明香氏（福岡市美術館）から各館が行う「高齢者プログラム」の事

例紹介があった。後半は、昨年度（バンクストリート教育大学、ニーナ・ジェンセン先生）と同様にフロアと、じっくり意見交換（参加者全員から各館の紹介やドッド先生への質問を受け付けて進行した）を重ねながら、レスター大学の博物館教育の実践方策、そして「地域社会の一員としての博物館の役割」について博物館機能論の観点から検証を進めた。

上記の感想から分かるように、会場はさながら「レスター大学大学院ドッドゼミナール」のような雰囲気でも、とても充実した時間となった。

海外から講師を招聘する場合、どうしても「せっかくの機会だから」ということで、講演会形式となり多くの受講者を求めることが多いが、今回のように30名程度で密度の高い議論を行うことも大切であると考えた。

以下、ドッド先生の「Mind,body,spirit:museums and an aging society」の講演概要を報告したい。まずRCMGのヴィジョンを提示した（HPは<http://www.le.ac.uk/rcmg>）。



ドッド先生講演風景

To carry out research that can inform and enrich creative museum thinking, policy and practice. To support museums to become more dynamic, inclusive and socially purposeful institutions.

RCMGは地域の博物館に関して調査研究する機関で、各館の設置理念を基に、より動的で社会に役立つ博物館づくりを支援しているというビジョンの提示は、参加者の気持ちをぐっと掴むものだった。

その後、世界、そして英国の高齢社会の現状を説明し、RCMGは「the socially purposeful museum」という視点から「MUSEUMS CHANGE LIVES」「MUSEUMS EXCHANGE WELLBEING」を目指して活動しているという話があった。

そして、「MUSEUMS CHANGE LIVES」「MUSEUMS EXCHANGE WELLBEING」を実現するための方法として、RCMG、博物館、行政、医療機関、地域住民がプロジェクトを組み、5つの行動（Connect→Be active→Take notice→Keep learning→Give）を取ると話した。

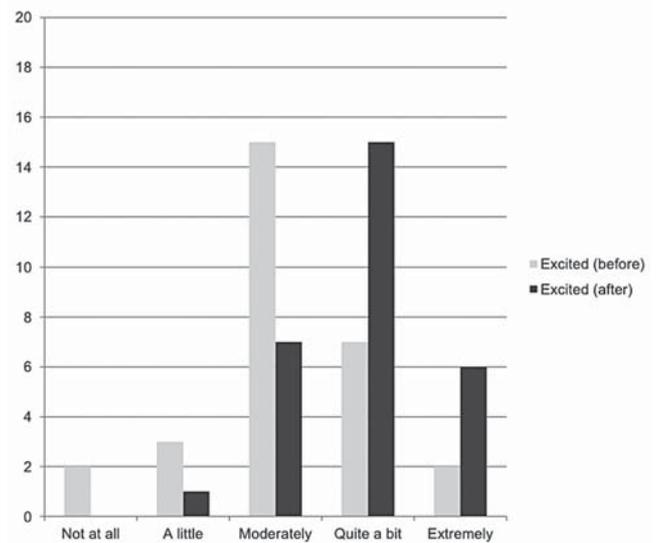
今回は、認知症高齢者を対象にした「House of Memories」というリパブル・ミュージアムなどの実践事例が紹介された。具体的には、思い出のものを手にして語り合う「回想法」や若者と高齢者が一緒に思い出の地をバス旅行する「Life Journeys」などがあった。特に注目したことは、こうした取り組みが実践研究としてなされていることである。とかく、プログラムは「企画して実行し、評価し、次回に活かす」という流れが多いが、センターの場合、さらに研究として深化させ、「MUSEUMS CHANGE LIVES」「MUSEUMS EXCHANGE WELLBEING」の実現による、地域社会の一員としての博物館の役割を模索している。

そのため、ドッド先生は「Evidenceが必要です」と言われた。そこで紹介されたのは、「Museum Wellbeing Measures Toolkit」であった。これはプログラム参加前後で「ENTHUSIASTIC」「EXCITED」「HAPPY」「INSPIRED」「ACTIVE」について5段階で評価するシートで、継続参加する認知症高齢者はそれぞれ最初に比べ評価が上がるという結果が出ているということだった。



評価シート (Museum Wellbeing Measures Toolkit)

## Excited



参加前後の変容分布図

そして、最後に私たちに4つの問いかけをして講演を締めくくった。

- ① How can we use museums to develop more dialogue and debate in society about implications of an aging population ?
- ② How are aging populations represented in museums ?
- ③ How are museum part of older people's everyday lives ?
- ④ What range of opportunities do we offer older people in museums ?

こうした話を聞く中で、ある参加者の「今日のお話を聞いていて、私たちの館でもぜひ実施したいのですが、その時の留意点を教えてください」という質問に対して、ドッド先生の「プログラムは端っこです。館は地域の課題にどう取り組むのか。館のミッションを見定めて、初めてプログラムができます。ミッションがなければプログラムも成立しないのです」というドッド先生の言葉はとても印象的であったし、今後の日本の博物館界でも、4つの問いかけとともに博物館機能論の観点から議論を深めていきたいと思った。

## JMMA会員の皆様へのお願い

### 〈20周年記念大会につきまして〉

来る6月6日(土)、7日(日)に第20回大会を開催いたします。

会員の皆様におかれましては、20周年という記念すべき大会ですので、どうか万難を排してご参加下さるよう格別のご願いを致します。

なお、プログラム等につきましては、現在、実行委員会で検討を進めております。決まり次第、皆様にご案内致します。ご多忙中とは存じますが、皆様の積極的なご参加を心よりお待ちしております。

- ◎日程：6月6日(土)、7日(日)
- ◎会場：東京家政学院大学
- ◎内容(予定)：第1日目 20周年記念事業、講演、指定討論(アトラクションも予定)  
第2日目 会員研究発表、アフタヌーンミュージアム

### 〈ミュージアム・マネージメント学事典20周年限定版につきまして〉

事典編集委員会では、20周年記念事業の一つであります「ミュージアム・マネージメント学事典」の刊行に向け、現在編集作業を進めております。JMMA事務局より販売する本事典は、20周年記念事業における【限定版】です。会員の方には2割引きでの販売となりますので、お一人最多ご注文でも3冊まで(法人は5冊まで)でお願いいたします。在庫がなくなり次第、限定版の販売は終了いたします。ご予約はJMMA事務局へメール・ファックス等でお願ひ致します。

第20回記念大会での販売を予定しています。詳細につきましては、決まり次第、皆様にご案内致します。

- ◎ミュージアム・マネージメント学事典 540ページ程度
- ◎出版社：学文社
- ◎価格：税込定価7,000円程度のところ、会員ご予約の場合は5,200円前後(2割引後の予定価格です)

## INFORMATION

### 文献寄贈のお知らせ

- 相山女学園大学 『Bulletin of Sugiyama Museology No.20』
- 村田麻里子著(人文書院発行) 『思想としてのミュージアム ものと空間のメディア論』
- 日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書  
『日本の博物館総合調査研究(平成25～27年度)』

### 日本ミュージアム・ マネージメント学会 法人会員一覧

(2015年3月末現在)

株式会社アートプリントジャパン	東京家政学院大学
アクティオ株式会社	東京家政大学 人文学部 教育福祉学科
公益財団法人阿蘇火山博物館 久木文化財団	株式会社トータルメディア開発研究所
株式会社江ノ島マリンコーポレーション	内藤記念くすり博物館
カラータ株式会社	長崎歴史文化博物館
公益財団法人 交通文化振興財団	株式会社西尾製作所
佐賀県立宇宙科学館	株式会社乃村工藝社
サントリーパブリシティサービス株式会社	三菱重工業株式会社
公益財団法人竹中大工道具館	ミュージアムパーク茨城県自然博物館
公益財団法人 多摩市文化振興財団	UCCコーヒー博物館
株式会社丹青研究所	早稲田システム開発株式会社
株式会社丹青社	(五十音順・敬称略)
公益財団法人つくば科学万博記念財団	学会活動に協賛していただいております